

### 「前期高齢者」 で妻に叱られた



土居修

2月中旬、3月号の原稿を送付した直後に大川編集長に送ったメール。  
「好き勝手、自己満足。そして、人生史的・道徳的な思いも少しばかり。発表の場をいただけることに、こころより感謝します。毎回の編集作業、ほんとうに頭が下がります」  
9分後に返信をいただいた。「なんか太宰治的なメール啊りがどうございませう。畏まって優等生の文ばかりじゃニューズも面白くないので妻シリーズは大切な位置にいます。これからも好きに書いてください」  
最上の氣遣い。感極まって思わず落涙。  
私には「優等生の文」は書けない。薄っぺらな人生が紡ぎだすのは「劣等生」の文でしかない。汗顔しつつも好き勝手に書き綴っている。ただ、妻に叱られ続けている男の、身の丈5尺3寸の男の詩精神

「おのれの墓碑銘はおのれの手で刻むのであるのみ。わがまは寛大な心で許したいだけ」といふ願う。  
65歳以上75歳未満を前期高齢者、75歳以上を後期高齢者と規定する新たな高齢者医療制度が施行されたのは2008年4月。その頃の私は50歳代を迎え、得も言われぬ男の色気をまとっていたといつてよい。半世紀を生きてきて漂う男の哀愁、幅広い分野に精通した知識と技能、気品のあふれる雰囲気。「おじさん」ではなく素敵なオジサマのままに、高齢者医療確保法などあずかり知らぬことよと嘯っていた記憶。  
しかしながら、この高退協ニュースが発行される翌日に64歳を迎える。あと1年で前期高齢者と呼ばれるのかと思うと、華麗なオジサマであった日々がよまなく愛おしい。高齢者の領域に「踏み入れる」のではなく、「組み込まれる」のである。人生が了解なしに一方的に決められていくという不条理。憤懣(ふんまん)やるかたない。  
血気盛んであった時代もすでに愛惜の対象となり、馬齢を重ねただけの現実を生きにくい。だが、いごっそうの看板だけは下ろすなよ

と守護霊の声。抵抗のひとつとして「へーい」あるいは「なんじやい、こりや」と横柄に返事をしながら生きていくと叱咤する。男の美学もそうせよと命じている。  
九月下旬のある日、市道に沿って東西に長い畑にキャベツ・白菜の苗を植え終えたとき、西の空には鮮やかな茜色が広がっていた。  
作業着を脱ぎながら、花壇の水遣りをしていく妻にいった。「今から練習しようかな」  
「勝手にすれば」  
農作業に動かしみながら、考え抜いた戦略に対する返答としてはあまりにも素っ気なかった。  
「褒めてくれないの」  
「どうして私が、褒めなければいけないのよ」  
ともに暮らして34年、かけがえない星霜をともに刻んできたはずではなかったか。未だに男の美学を解しない女。こころは如何ともし難い。  
付き合っていた頃を思い出す。週2回、決まって花束を抱えて私の部屋を訪れてくれた。料理がおいしいとはお世辞にもはいえなかったが、「あなたの色に染められ一度の人生それさえ捨てることもかまわない」だから

お願い／そばに置いてね」とロウさみながら嬉々として台所に立っていた姿。テレサ・テンが「不倫」を歌うのは勝手だと切り捨てながら、私に心酔している女性を悦に入っで眺めていた日々を懐かしむ。それが詭計であったのかと振り返ってみれば、もう涙ぐむしかない。  
「でも」と私を横目で見ながら、妻がいった。  
この仕事には可憐さを感じるから、どうにもやるせない。世間一般の58歳の熟女には到底醸し出すことはできない姿態だと思つと、法悦にひたつてしまふ不思議。  
「それは医療制度の定義でしょ。道路交通法では70歳以上が高齢者なのよ」  
「そうか。だったら、私はまだ高齢者にはならないんだ」  
「ばかじやないの」  
「なんてよ」と問い返す。  
「視力も落ちたし、耳だって速くなっているじやないのよ」  
反論できない男のあわれさ。しかし、と考えた。AとTはもはや枯野の状態、KとIに至ってはリング型肥満の見事な典型。彼ら(以前登場した高校時代の悪友)と比べれば、私は青春であった時代の美しさを確かに保っているではないか。意を決して告げた。

「頭髪は十分にあるし。太っでもないぜ」  
「あたりまえでしょ。そうならないと思つたから、結婚したのよ」  
返すことばが見つからなかった。「なんじやい、こりや」と応じていけば、必ず叱られたにちがいない。

### 高退協文庫

### 短歌

Takashi Yanai Concert

柳井卓の作品を聴く

山本晶子



### 俳句

#### 花蘇鉄の四季

小澤 幸泉

正夢になるかも八月十五日  
六月の雨は土佐路を叩きつけ  
故里へつゞく夏空土佐の山  
梅酒はほろい梅の実漬けている  
酔美夢をよそよそお別れね

### 川柳

#### 帆傘抄

小澤 幸泉

老いながら負けぬ勇気を持っている  
妻と二人復たも文句も分けあえる  
神の国心の中に見えてくる  
今日もまた緑の地図を掲げます  
今朝もまた重い頭に起される  
生き抜いてきた君にまた会えた  
生き抜いてくろく憲政止めさせる

#### 迫る気候危機

叶岡淑子

気候危機半世紀前に予測せし日本人のノーベル賞受賞  
わたしの未来奪うな若者よ世界各地で街頭に立つ  
温暖化する地球に住むわれ科の警告を受け止めろ

#### シヤクラの花の、シヤイタは

田上悦子

秋の夜は若き日のラ長編(生誕二百年ドス上)ノスキ  
長編のカラマツノを眺むてはひかざる苦界浄土(全三部)  
さくらをば「シヤクラ」にせしはMINAMITAを病に被せしン病なり

※前回の巻末(9月号)において叶岡淑子さんの次の二句が編集・印刷時に誤りがありました。お詫びしたまいます。訂正いたします。

叶岡淑子

科学よりも人命よりも収益を選びし五輪の頭業主ら  
感染者自覚はまた入院が無策同然 蟬声はけし

### ワンシーター 王希奇「一九四六」高知展へのご案内(お願い)

私(柳井)は1946年に旧満州のコロ島港から、米軍の上陸用舟艇で故国へ引き揚げました。11月28日～12月5日、かるぽーとで開催される『王希奇「一九四六」高知展』の作品名「一九四六」は、この105万人が引き揚げた1946年のコロ島港が題材となっております。「敗戦」「引き揚げ」が死語となりつつある今、高退協の会員の皆様にも、ぜひ、この絵画展にお運び頂けたら、主催者としてこの上なくうれしく有難く思います。

チケットは、胡摩崎(高退協)、柳井のところにもありますので、ご一報ください。

王希奇「一九四六」高知展 実行委員長 柳井 卓 (090-1177-2175)

王希奇「一九四六」高知展

期日 2021年11月28日(日)～12月5日(日) ※11月29日(月)は休館

開場時間 9:30～18:30 最終日は16:00まで 入場料 前売り 1000円 一般 1200円

会場 高知市文化プラザ かるぽーと 市民ギャラリー第1展示室

### 第185回高退協読書会案内

12月9日(木) 14時～ ムトー荘2F(206号室)

テキスト スマホ脳(新潮新書)

アンデシュ・ハンセン(著)、久山 葉子(翻訳)

※うつ、睡眠障害、学力低下、依存症……最新の研究結果があぶり出す恐るべき真実。教育大国スウェーデンを震撼させ、社会現象となった世界的ベストセラー。

参加費 六百元(会場使用料)参加希望者は直接お越しください。

お問い合わせは次の方々のいずれかにご連絡ください。

樋口勇雄 高橋泰宏 小島真子 大川法由記 井上圭介 三谷隆彦

